長野大学紀要　第18巻第2号　133—141頁（241—249頁）1996

宮沢賢治「無声慟哭」について

Commentaires sur les poèmes “Sanglots sans cris” de Miyazawa Kenji

関　戸　嘉　光
SEKIDO Yoshimitsu

目　次

はしがき
1　『無声慟哭』の成立時期について
2　「永訣の朝」
3　「松の針」
4　「無声慟哭」
5　『無声慟哭』以後、慟哭—挽歌—再会

はしがき

詩人の菅原克巳さんが近所に住んでいて、よく往き来したのは戦後まもない頃のことでした。菅原さんは、私が宮沢賢治の愛読者だと知って、ある日、賢治の詩ではどれが一番好きですか、とききました。私は、「稲作挿話」や「野の師父」や「産業組合青年会」や、そして、たった一つを挙げるとすれば、長篇詩「小岩井農場」の最後のパート九の最後の36行です、と答えました。菅原さんはさらに『無声慟哭』はどうですか、ときき、私は、あれは最高です、最高ですが、あれはあんまり辛い、あんまり辛くて、とても愛誦するというわけにはいきません、と答えました。事実、賢治の作品は、暗記するほど幾度も繰りかえし読んだのがたくさんありますが、『無声慟哭』これば かりは、読みかえすこと最も少ない作品です。

しかし、現在はちがいます。現在なら私は敢えて『無声慟哭』を第一に挙げます。その辛さが私に強い共感を喚びおこし、それが反って私を心の平安に導いてくれるからです。

何故、どうして？　それを、概念の言葉で説明することは困難です。そのもの自体に当たって、私がそれをどう感受したかをお話して、そこから了解して頂くほかはありません。

では、本題に入ることに致します。

1.　『無声慟哭』の成立時期について

『無声慟哭』は5篇の詩からなっています。「永訣の朝」、「松の針」、「無声慟哭」、「風林」、「白い鳥」の5篇です。賢治生前刊行の唯一の詩集『春と修羅—心象スケッチ』の目次を見ると、「永訣の朝」以下3篇には、《一九二二、一一、二七》と日付がつけてあり、「風林」は（一九二三、六、三)、「白い鳥」は（一九二三、六、四）の日付となっています。

1922年11月27日というと、賢治の妹トシ子が死んだ当日です。この日を境に賢治の詩作はピタリと中断されます。それまで殆ど毎日のように続けられていた詩作あるいは「心象スケッチ」は、その後、翌年の6月3日付の「風林」まで、殆ど半年の長期にわたって中断されたのです。妹トシ子の死が賢治にとってどれほどの打撃だったか、推しはかられます。

ところで、11月27日付の3篇の詩ですが、その日に実際に作詩されたわけではありません。日付は、作品の執筆ないし完成の日付ではなく、その発想の日付です。おそらく、「風林」、「白い鳥」と前後する、ほぼ同時期に作られたと考えてよいと思います。（賢治の口語体の詩には、殆ど年月日の日付が付けてありますが、これらもすべて発想の日付でしょう)。

それにしても、「永訣の朝」以下の3篇は、トシ子臨終のその日のことをその場で記録したとし

か思えないほどの、迫真の強烈な鮮明さで読者の心を打ちます。そこに詠(うた)われている事柄はすべて、詠われている通りのその日の事実です。それは、最後までトシ子の看病に当たった付添婦細川キヨの回顧談に徴しても確かめることができます[1]。また、『春と修羅―心象スケッチ』初版本の目次を見ますと、「永訣の朝」以下3篇の日付には二重括弧が、「風林」以下の2篇の日付には一重括弧がつけられています。賢治自身が、この二種の日付に意味の違いがあることを示そうとしたものと考えられます。

2. 「永訣の朝」

まず、いつものように、作品の音読から始めましょう。

けふのうちに
とほくへいつてしまふわたくしのいもうとよ
みぞれがふつておもてはへんにあかるいのだ
　　(あめゆじゆとてちてけんじや)
うすあかくいつさう陰惨(いんざん)な雲から
みぞれはびちよびちよふつてくる
　　(あめゆじゆとてちてけんじや)
青い蓴菜(じゅんさい)のもやうのついた
これらふたつのかけた陶椀(たうわん)に
おまへがたべるあめゆきをとらうとして
わたくしはまがつたてつぽうだまのやうに
このくらいみぞれのなかに飛びだした
　　(あめゆじゆとてちてけんじや)
蒼鉛(さうえん)いろの暗い雲から
みぞれはびちよびちよ沈んでくる
ああとし子
死ぬといふいまごろになつて
わたくしをいつしやうあかるくするために
こんなさつぱりした雪のひとわんを
おまへはわたくしにたのんだのだ
ありがたうわたくしのけなげないもうとよ
わたくしもまつすぐにすすんでいくから
　　(あめゆじゆとてちてけんじや)
はげしいはげしい熱やあえぎのあひだから
おまへはわたくしにたのんだのだ
　銀河や太陽　気圏などとよばれたせかいの
そらからおちた雪のさいごのひとわんを……
……ふたきれのみかげせきざいに
みぞれはさびしくたまつてゐる
わたくしはそのうへにあぶなくたち
雪と水とのまつしろな二相系(にさうけい)をたもち
すきとほるつめたい雫にみちた
このつややかな松のえだから
わたくしのやさしいいもうとの
さいごのたべものをもらつていかう
わたしたちがいつしよにそだつてきたあひだ
みなれたちやわんのこの藍のもやうにも
もうけふおまへはわかれてしまふ
(Ora Orade Shitori egumo)
ほんたうにけふおまへはわかれてしまふ
あぁあのとざされた病室の
くらいびやうぶやかやのなかに
やさしくあをじろく燃えてゐる
わたくしのけなげないもうとよ
この雪はどこをえらばうにも
あんまりどこもまつしろなのだ
あんなおそろしいみだれたそらから
このうつくしい雪がきたのだ
　(うまれでくるたて
　　こんどはこたにわりやのごとばかりで
　　くるしまなあよにうまれてくる)
おまへがたべるこのふたわんのゆきに
わたくしはいまこころからいのる
どうかこれが天上のアイスクリームになつて
おまへとみんなとに聖い資糧をもたらすやうに
わたくしのすべてのさいはひをかけてねがふ[2]

絶唱ですね。わが国挽歌の最高傑作という評価がありますが、私も文句なしに賛成です。もしこれに並ぶ挽歌をほかに探すとすれば、私は、万葉集巻一の大来皇女(おおくのひめみこ)が弟の大津皇子の非業の死を哀しみ傷んでうたった短歌を挙げることができるくらいだと思います。

みまくほりわがする君もあらなくになにしか来けむ馬つかるるに

大来と大津は姉弟(あねおとうと)、賢治とトシ子は兄妹(あにいもうと)、関係は逆になっていますが、どちらもきょうだい、切ないまでの愛惜の情が噴きあげるようにうたわれています。

では、いくつか問題点について、お話すること

にします。

（a）「あめゆじゆとてちてけんじや」

これはトシ子の病床からの言葉です。方言で書かれていますので、そのときそのままの言葉とわかります。この同じ言葉がこの詩のなかで4回くりかえされています。最初の言葉は、賢治はぼんやり聞くともなしに聞きながしたようです。2回目の言葉でハッと気がついて、賢治は鉄砲弾のように霙のなかへ飛び出します。霙のなかで賢治はトシ子の言葉をもう一度たしかめるように思い返します。それが第3回目の「あめゆじゆ……」です。そして賢治は、どうしてトシ子が「死ぬといういまごろになって」雨雪の一椀を賢治に頼んだのか、そのトシ子の気持が電光のように解ります。「わたくしを一生明かるくするために、こんなさっぱりした雪の一椀を、お前は私に頼んだのだ」、そうだったのか、「ありがとう、私の健気な妹よ」といって、賢治はトシ子とともに信仰の途をまっすぐに進んでいくことをトシ子に誓います。その賢治の誓いの心が最後の、4回目の「あめゆじゆ……」です。4回くりかえされたこの言葉を、私はそう理解します。

（b）（Ora Orade Shitori egumo）

これもトシ子の言葉です。しかし、なぜこの言葉だけローマ字で書いたのでしょうか。おそらくこの言葉だけが、賢治にとって特別の意味と圧力をもって受けとられたからだと思います。特別の、とは？

トシ子は「私は私で一人で行くの！」といったのです。「一人で」といったのです。

賢治は、それまでずっと、信仰をともにする妹トシ子と何処までも一緒にいくつもりで生きて来たのでした。ですからこのトシ子の言葉は賢治にとってどんなに辛かったことか。胸を抉られる思いだったに違いありません。

トシ子は、自分が今、ひとりていかねばならないのだということを、自分にいいきかせるようにしてこの言葉をいったのでした。そのトシ子の悲しい諦めの心が賢治にはよくわかったのです。それを表現するには、ほかとは違った特別の文字を用いる以外に方法がなかったのです。トシ子のこの言葉だけがローマ字書きになっている意味を、私はそんな風に理解します。

ついでに付言しますと、この詩の終りの辺りに出ているトシ子の言葉「うまれでくるたて／こんどはこたにわりやのごとばかりで／くるしまなあよにうまれてくる」も、全集編者の解説によると、原稿の段階で一旦ローマ字書きに直され、それが更に平がな書きに更訂正されていて[3]、結局、初版本ではローマ字書きは「Ora Orade ……」だけとなったのです。そんなことからも、このトシ子の言葉の賢治における特別の意味が解るような気がします。

（c）「天上のアイスクリーム」

この詩の最後の3行は、あとで賢治自身の手で下のように訂正され、4行になっています。

どうかこれが兜卒の天の食に変つて
やがてはおまへとみんなとに
聖い資糧をもたらすことを
わたくしのすべてのさいはひをかけてねがふ[4]

この訂正がいつ頃なされたものかわかりませんが、現行の刊本の多くは、この訂正された形をとっています。私も、「天上のアイスクリーム」では薄っぺらな感じで戴けない、「兜卒の天の食」の方が詩として優れているような気がします。

とはいっても、忘れていけないことは、賢治の当時のアイスクリームと我々の現代のそれとの違い、という点です。1922年、大正11年というと、私は小学生低学年でした。その頃は、アイスクリームはめったにお目にかかれない高級なハイカラな食べ物でした。一年中どこででも買える今日とは大ちがいで、夏季だけの西洋食堂のデザートや洋菓子喫茶店で食べることのできる貴重品だったのです。一さじ二さじトシ子に食べさせる雨雪に「天上のアイスクリーム」という句が賢治に閃いた、その気持、私くらいの年令の者にはよくわかります。しかし、今の若い人たちには無理でしょうね。アイスクリームが普及したのは、昭和になってからです、ドライアイスが現われてお持ち帰りができるようになってからです[18]。

（d）　雨雪の「ひとわん」と「ふたわん」

賢治は「ふたつのかけた陶椀」に雨雪をとって来ます。そして詩の結びのところで、「このふたわんのゆきに」それが「おまへとみんなとに聖い資糧をもたらすやうに」と祈ります。ところが、19行目には、「雪のひとわんを」とあり、27行目では「雪のさいごのひとわんを」となっています。これはどういうわけか、という疑問が出るかもしれませんが、それは、賢治がとって来て、賢治が祈をこめて願ったのは二椀の雨雪だったのであり、トシ子が頼んだのは一椀の雨雪だったのです。頼んだトシ子の側からは「ひとわん」で、頼まれた賢治の方では両手にいっぱい出来るだけたくさんの「ふたわん」だったのです。19行目の「ひとわん」にも、27行目の「ひとわん」にも、「おまへはわたくしにたのんだのだ」という1行がついています。

それは問題でないとして、終りから5行目の「ふたわんの雪」は、一椀はトシ子のため、一椀はみんなのため、という賢治の願いがこめられている、という解釈もあるようですが、私は、そんなに厳密に考えなくてもいいと思います。賢治がとってきた雨雪、それが両手いっぱいの二椀の雨雪だった、その全体に賢治は願ったのだ、と思います。

（e）「けなげないもうと」と「やさしいいもうと」

これは、ここでは別に疑問もないと思いますが、『無声慟哭』第3篇の「無声慟哭」で中心的主題となりますので、ここで一言しておく必要があると思います。

病苦と闘い信仰の途をひたすら歩み進もうとするトシ子の精神的な姿勢が「けなげ」であり、肉体をもった此の世のトシ子が、姿も心も「やさしい」と賢治に写ったのです。賢治におけるこの二重のトシ子像については、「無声慟哭」のところでお話することにします。

（f）「うまれてくるたて／こんどは……」

ちょっと前に（b）の項で申しましたように、原稿の清書段階で、この3行はローマ字書きに直され、それを更に平がな書きに戻して、初版本の形になったのだそうですが、細川キヨの回顧談によると[5]、トシ子臨終のとき父政次郎が「何かいうことはないか」ときき、それに答えたトシ子の言葉ということになっています。

賢治が一旦この3行をローマ字書きにしたのは、これがトシ子の此の世にいい残す最後の言葉として、そこに特別の重点をおくことが必要だと思ったからでしょう。しかし、賢治は思いかえします。ローマ字書きにしたら、「おら　おらでしとりえぐも」といったあの悲しいさびしいトシ子の言葉と同質同次元のものになってしまう、そうしてはならない、と賢治は考えたにちがいない。私はそう思います。

3.　「松の針」

さつきのみぞれをとつてきた
あのきれいな松のえだだよ
おお　おまへはまるでとびつくやうに
そのみどりの葉にあつい頬をあてる
そんな植物性の青い針のなかに
はげしく頬を刺させることは
むさぼるやうにさへすることは
どんなにわたくしたちをおどろかすことか
そんなにまでもおまへは林へ行きたかつたのだ
おまへがあんなにねつに燃され
あせやいたみでもだえてゐるとき
わたくしは日のてるとこでたのしくはたらいたり
ほかのひとのことをかんがへながら森をあるいてゐた
　　《ああいい　さつぱりした
　　まるで林のながさ来たよだ》
鳥のやうに栗鼠（りす）のやうに
おまへは林をしたつてゐた
どんなにわたくしがうらやましかつたらう
ああけふのうちにとほくへさらうとするいもうとよ
ほんたうにおまへはひとりでいかうとするか
わたくしにいつしよに行けとたのんでくれ
泣いてわたくしにさう言つてくれ
　　おまへの頬の　けれども
　　なんといふけふのうつくしさよ

わたくしは緑のかやのうへにも
この新鮮な松のえだをおかう
いまに雫もおちるだらうし
そら
さわやかな
terpentine（ターペンテイン）の匂もするだらう[6]

この詩の問題点についてお話します。

（a）「そんなにまでもおまへは林へ行きたかつたのだ」

この一句で思い出されるのは『オホーツク挽歌』の最後の詩「噴火湾（ノクターン）」の一節です。

おらあど死んでもいゝはんて
あの林の中さ行ぐだい
うごいて熱は高ぐなつても
あの林の中でだらほんとに死んでもいいはんて
鳥のやうに栗鼠のやうに
そんなにさはやかな林を恋ひ（後略）

「松の針」の16～17行目の「鳥のやうに栗鼠のやうに／おまへは林をしたつていた」が、ここでまた繰りかえされているのです。

（b）「ほかのひとのことをかんがへながら」

「ほかのひと」とは誰のことでしょうか。「ほかの女のひと」でしょうか。「自分以外の他人一般」でしょうか。私は、そのどちらでもないと思います。当たりまえ過ぎる当たりまえのことですが、「トシ子以外のほかの人」だと思います。それが誰かが問題ではなく、賢治がいいたかったのは「トシ子以外の」という点で、その意味での「ほかの」だったと思います。

（c）「ほんたうにおまへはひとりでいかうとするか」

狂わんばかりのこの賢治の訴えについては、「永訣の朝」で触れましたから、繰りかえしませんが、賢治はここでは、トシ子を追慕する心を生の肉声で表現しています。

（d）「おまへの頬の　けれども／なんといふけふのうつくしさよ」

「松の針」でいちばん大事な処です。この世の存在としての、肉体をもったトシ子の肉体的美しさが、直截にうたわれています。この点については、次の「無声慟哭」で、もう少し突っこんだお話をすることにいたしますが、「松の針」は、その「無声慟哭」への橋渡しの役割をしているといえます。

4. 「無声慟哭」

では、最後の「無声慟哭」です。問題の多い、私には難解すぎる詩ですが、思いきって見当ちがいを惧（おそ）れず話してみましょう。

まず全文を音読します。

こんなにみんなにみまもられながら
おまへはまだここでくるしまなければならないか
ああ巨きな信のちからからことさらにはなれ
また純粋やちいさな徳性のかずをうしなひ
わたくしが青ぐらい修羅をあるいてゐるとき
おまへはじぶんにさだめられたみちを
ひとりさびしく往かうとするか
信仰を一つにするたつたひとりのみちづれのわたくしが
あかるくつめたい精進（しやうじん）のみちからかなしくつかれてゐて
毒草や螢光菌のくらい野原をただよふとき
おまへはひとりどこへ行かうとするのだ
　（おら　おかないふうしてらべ）
何といふあきらめたやうな悲痛なわらひやうをしながら
またわたくしのどんなちいさな表情も
けつして見逃さないやうにしながら
おまへはけなげに母に訊（き）くのだ
　（うんにや　ずゐぶん立派だぢやい
　けふはほんとに立派だぢやい）
ほんたうにさうだ
髪だつていつさうくろいし
まるでこどもの苹果の頬だ
どうかきれいな頬をして
あたらしく天にうまれてくれ
　《それでもからだくさえがべ？》
　《うんにや　いつかう》
ほんたうにそんなことはない
かへつてここはなつののはらの

ちいさな白い花の匂でいつぱいだから
ただわたくしはそれをいま言へないのだ
（わたくしは修羅をあるいてゐるのだから）
わたくしのかなしさうな眼をしてゐるのは
わたくしのふたつのこころをみつめてゐるためだ
ああそんなに
かなしく眼をそらしてはいけない[7]

前の詩で軽く触れられた地上的、肉体的存在としてのトシ子が、この詩では正面の主題に据えられています。それに直接関連して賢治の内面の修羅が吐露されています。問題はその修羅の内実です。

もともと賢治は、内に修羅を抱えた人間でした。彼の生前刊行の唯一の詩集の書名がすでに『春と修羅』となっています。賢治の修羅について語るとすると、あんまりテーマが大きすぎて、とても無理、別の機会にゆずらなければなりませんが、でも一言だけ、ここでいっておきたいと思います。

詩集『春と修羅』のなかに「春と修羅」と題する19篇の詩があり、そのなかに「春と修羅」と題する詩が1篇あります。「春と修羅」が三重の入れ子になっているわけです。賢治の修羅が端的に吐露されている詩です。それを一部抜粋して引用します。

（前略）いかりのにがさまた青さ
四月の気層のひかりの底を
唾(つばき)し　はぎしりゆききする
おれはひとりの修羅なのだ（中略）
ああかがやきの四月の底を
はぎしり燃えてゆききする
おれはひとりの修羅なのだ（中略）
（まことのことばはここになく
修羅のなみだはつちにふる）（後略）[8]

私のいちばん好きな詩の一つです。ここで賢治は自分を修羅だといっていますが、その修羅と、いま問題の「無声慟哭」のなかの修羅とどうつながるのか、それを考えてみたいと思います。

結論からいいますと、妹トシ子への賢治の地上的愛、それが賢治の「修羅」の中核にあったのではないか。と私には考えられるのです。賢治に法華経信仰の懈怠があったわけでもないのですから。

もう一つ。「ある恋」と題した口語詩があります。

なんだこの眼は　何十年も見た眼だぞ
昨日も今日も問ひ答へしたあの眼だぞ
向ふもぢっと見てゐるぞ
清楚なたましひたゞそのもの

賢治の短歌の清書原稿の余白に鉛筆で書かれているものです[9]。この詩の対象をトシ子そのひととする解釈もあるようです。それを私も否定しかねます。賢治と妹トシ子との間には普通の兄妹愛を超えた愛があったことは、疑問の余地がないと思います。

賢治の童話に出てくる兄妹、たとえば「双子の星」のチュンセ童子とポーセ童子や「グスコーブドリの伝記」のブドリとネリや「黄いろのトマト」のペムペルとネリなども、賢治のそんな感情の投影と考えられます。

ではその「修羅」が、この詩のなかで、どう表現されているか。

（a）「わたくしが青ぐらい修羅をあるいてゐるとき」

病床で苦しんでいるトシ子をみつめながら、賢治は、自分はいま青ぐらい修羅をあるいている、というのです。「巨きな信のちからから」故意に身をひいて、「純粋」やさまざまの「徳性」を失ってしまって、自分はいま修羅のなかで蹠(もが)いている、というのです。繰りかえしますが、賢治は、この世の肉体をもったトシ子をこの世に引きとめておこうとしているのです。それが修羅道だと、賢治は自分を反省します。だから、

「毒草や蛍光菌のくらい野原をただよふとき」

といっているのです。だが、どうしようもないのです。

（b）「ひとりさびしく往かうとするか」……

「おまへはひとりどこへ行かうとするのだ」

ここでまた、「ひとり」が繰りかえして強調されていますね。

（c）「ただわたくしはそれをいま言へないの

だ／(わたくしは修羅をあるいてゐるのだから)」

なぜ、修羅道にいると、それを言えないのでしょうか。いえないのではなくて、いいたくないのです。トシ子をこの世の姿のままこの世にとどめておきたいのです。天上界がどんなに素晴らしい処であろうと、そこへは行かせたくないのです。髪だって常にもまして黒いし、頬もまるでリンゴのようだし、そんな地上の姿のトシ子を、その美しい姿のまま賢治は愛惜してやまないのです。この愛惜の情を賢治は修羅といったのです。修羅だから、ここを「白い花の匂でいっぱい」の天上界そのものと観じようとしても、それができないのです。

(d)「わたくしのふたつのこころ」

賢治の二つの心とは何のことでしょうか。一つは、トシ子が天上界へ生まれかわることを願う、信仰に生きぬこうとする心でしょうか。そしてもう一つは、トシ子がこの美しい姿のまま、いつまでも地上の肉体界にとどまっていてくれと、狂わんばかりに願う賢治の修羅の心でしょうか。

この二つの心を、賢治は「かなしさうな眼をして」みつめていたのでしょうか。でも、悲傷にたえかねて、彼は「かなしく」眼をそらそうとします。それを、賢治は自分で自分を叱りつけています。「ああそんなに／かなしく眼をそらしてはいけない」。トシ子の最後を最後までしっかり見詰めて見送ってやろう、というのです。賢治はトシ子の耳もとで大声にお題目を唱えます。

わたくしがその耳もとで
遠いところから声をとつてきて
そらや愛やりんごや風　すべての勢力(エネルギー)のたのしい根源
万象同帰のそのいみじい生物の名を
ちからいつぱいちからいつぱい叫んだとき
あいつは二へんうなづくやうに息をした
白い尖つたあごや頬がゆすれて
ちひさいときよくおどけたときにしたやうな
あんな偶然な顔つきにみえた
けれどもたしかにうなづいた[10]

これは「青森挽歌」のなかの一節です。「無声慟哭」から略々ふた月あとの作ですが、「無声慟哭」の最後の二行の理解のために、ここに引用しておきます。

以上で『無声慟哭』3篇を読みおえたことにいたします。あと、「風林」と「白い鳥」2篇がありますが、これらは『無声慟哭』とは、その意図する主題と拠って立つ基盤とを異にするものですし、また、賢治自身が詩集『春と修羅—心象スケッチ』の初版本に鉛筆で抹消の斜線を引いているものですので[11]、ここでも省くことにしました。

それに、右の3篇で、正にぴたりと、詩としてのリズムが整うように私には思われるからでもあります。賢治がどんな意図から「風林」以下の2篇を削除したかわかりませんが、たとえば能楽に序破急ということがあります。『無声慟哭』3篇の詩が、ちょうどこの序破急のリズムに合致しているように、私には思われるのです。とすれば、やはり「風林」以下は別の作として、即ち「挽歌」として切り離して考えてよいでしょう。

最後の最後に、『無声慟哭』という題名について一言しておきます。

実にいい題ですね。圧倒的な迫力で私たちの胸に迫ってくる題です。

ほんとうは、賢治は声をあげて号泣したのでした。前記細川キヨの回顧談によると、「押入をあけて、ふとんをかぶってしまって、おいおいと泣きました」とあります[12]。また、賢治の作『手紙(四)』では、「チュンセはげんこを眼にあてて、虎(とら)の子供のやうな声で泣きました」と書いています[13]。文字どおり慟哭だったのです。にもかかわらず、「無声」という。抑えて抑えて抑えきれない号泣のさまが痛いほど感じられます。

無声慟哭という語は、何か出典のある言葉かもしれないと思って、『諸橋大漢和』を引いてみました。「有声の声は百里に過ぎず、無声の声は四海に施(およ)ぶ」という句が「無声」の用例として挙げてありました。しかし「無声慟哭」はありませんでした。やはり賢治の創作ですか。だが、出典の有無など問題ではありません。最高の悲歌にぴったりの最高の題名だと思います。

5.『無声慟哭』以後　慟哭—挽歌—再会

私の話を終えるにあたって、『無声慟哭』以後の賢治について、簡単に付け加えておきたいと思

います。

まず、いまチュンセとポーセのことが出ましたが、その『手紙（四）』について、ちょっと話しておきます。

この『手紙（四）』の成立は、『無声慟哭』に続く『オホーツク挽歌』『風景とオルゴール』とほぼ同時期と推定されます。私は、たいした根拠もなく、ただ何となく、大正十二年九月頃のような気がするのですが……。

横ながの上質紙1枚に五号活字で活版印刷されたもので、署名も表題もありません。賢治はこれを、周囲の不特定多数の人々に配布しました。郵送したり手渡したり、学校の下駄箱に入れておいたりしたそうです。

チュンセは賢治であり、ポーセはトシ子であり、この手紙を出す「わたくし」はこれも賢治であること、申すまでもありますまい。「わたくし」にこの手紙を出すように云いつけた「あるひと」は、『銀河鉄道の夜』の終わりのほうで出てくるブルカニロ博士、あるいは「やさしいセロのやうな声」と同一人物でしょう。彼の法華経信仰から聞こえてくるもう一人の内面の賢治でしょう。

ここで注目しておきたいのは、この「あるひと」の言葉です。「チュンセはポーセをたづねることはむだだ。なぜなら……みんな、みんな、むかしからのおたがひのきやうだいなのだから」という言葉です。そして、「むだだ」といいながら、すぐつづけて「さあお前はチュンセやポーセやみんなのために、ポーセをたづねる手紙を出すがいい」といったのです。

一見矛盾しているようですが、いやそうでない。むだなのは、チュンセがポーセをたずねること、すなわち、この世の人間としてのチュンセがこの世の人間としてのポーセと、もう一度この世で会おうとすることであって、いまこの世に存在する「わたくし」が、チュンセやポーセを含めて此岸彼岸のみんなのために、この世から去っていったポーセが天上のどこにどうしているか探すことは、決してむだではない、ということだからです。だからこの「あるひと」はいいます。「チュンセがもしもポーセをほんたうにかあいさうにおもふなら、大きな勇気を出してすべてのいきものののほんたうの幸福をさがさなければいけない。それはナムサダルマプフンダリカサスートラ[19]というものである。チュンセがもし勇気のあるほんたうの男の子なら、なぜまつしぐらにそれに向つて進まないか」。

実はこれが、『無声慟哭』のすべての悲傷を焚いて賢治が辿りついた信仰の結論だったのです。

『無声慟哭』につづく『オホーツク挽歌』、そのなかの「青森挽歌」で賢治は、

《みんなむかしからのきやうだいなのだから
けつしてひとりをいのつてはいけない》
ああ　わたくしはけつしてさうはしませんでした
あいつがなくなつてからあとのよるひる
わたくしはただの一どたりと
あいつだけがいいとこに行けばいいと
さういのりはしなかつたとおもひます[14]

とうたつています。ひとりを祈ること、それは地上的愛の次元です。賢治はそれを乗り超えようと、自分を鞭打ちます。しかし、「理智」ではわかっても、感情はついていきません。挽歌はつづき、「噴火湾（ノクターン）」で、

駒ケ岳駒ケ岳
暗い金属の雲をかぶつて立つてゐる
そのまつくらな雲のなかに
トシ子がかくされてゐるかもしれない
ああ何べん理智が教へても
私のさびしさはなほらない
わたくしの感じないちがつた空間に
いままでここにあつた現象がうつる
それはあんまりさびしいことだ
（そのさびしいものを死といふのだ）
たとへそのちがつたきらびやかな空間で
トシ子がしづかにわらはうと
わたくしのかなしみにいぢけた感情は
どうしてもどこかにかくされたトシ子をおもふ[15]

という、この世の姿でのトシ子を慕う賢治の哀切きわまりない詞で結ばれています。そしてこれが、賢治の挽歌の最後の言葉だったのです。

こうして賢治は挽歌に別かれをつげて、新しい生きる途をさがします。

次の『風景とオルゴール』からは、もう、トシ

子トシ子の呼びかけはありません。しかし、賢治の固い決意を以てしても、気分転換は、そう容易ではありませんでした。賢治自身の自分を厳しく叱咤する理性的努力が必要だったのです。その苦闘の表白が、この『風景とオルゴール』13篇の詩です。そのなかの1篇「宗教風の恋」を下にあげておきましょう。

（前略）なぜこんなすきとほつてきれいな気
層のなかから
燃えて暗いなやましいものをつかまへるか
信仰でしか得られないものを
なぜ人間の中でしつかり捕へようとするか
（中略）どうしておまへはそんな医される筈
のないかなしみを
わざとあかるいそらからとるか
いまはもうさうしてゐるときでない
さうしてゐるのが悪いとかいゝとか云ふので
はない
あんまりおまへがひどからうとおもふので
みかねてわたしはいつてゐるのだ
さあなみだをふいてきちんとたて
もうそんな宗教風の恋をしてはいけない
そこはちやうど両方の空間が二重になつてゐ
るところで
おれたちのやうな初心のものの
居られる場所では決してない[16]

こう賢治は自分で自分にいいきかせて、再び新しく立ちあがろうとします。この詩の日付は一九二三、九、一六です。

翌年早々に詩集『春と修羅―心象スケッチ』が出版されます。それを区切りに、賢治は、かっきりみちをまがり、『春と修羅第二集』以降の新しい生活にはいります。農村と農民を対象にした衆生済度の菩薩行の実践が始まるということになるのです。

賢治は、慟哭から挽歌をへて竟（つい）にトシ子に再会したのです。それは詩集『春と修羅』の「序」でうたわれているように、「（すべてがわたくしの中のみんなであるやうに／みんなのおのおののなかのすべてですから）」[17]という、賢治の宗教的世界観のなかでの再会だったのです。

（賢治輪読会での報告
1994. 8. 26　於白河市立図書館）

（せきど　よしみつ　名誉教授）

（1996. 5. 28　受理）

注

1）森荘己池著「宮沢賢治の肖像」147～157頁、津軽書房刊。
2）ちくま文庫「宮沢賢治全集」第1巻156～159頁。
3）筑摩書房刊「校本宮沢賢治全集」第2巻355頁。
4）宮沢家蔵の「春と修羅」初版本への賢治自身の加筆。前掲「校本賢治全集」第2巻138頁参照。
5）森荘己池前掲書155頁。
6）ちくま文庫「宮沢賢治全集」第1巻160～161頁。
7）同上162～164頁。
8）同上29頁。
9）前掲「校本賢治全集」第6巻346頁、857頁。
10）前掲ちくま文庫「賢治全集」第1巻179～180頁。
11）前掲「校本賢治全集」第2巻144～151頁。
12）森荘己池前掲書156頁。
13）前掲ちくま文庫「賢治全集」第8巻376頁。
14）同上第1巻187～188頁。
15）同上207～208頁。
16）同上215～216頁。
17）同上16頁。
18）妹トシ子は目白の日本女子大を卒業目前にして病にたおれ、東大付属小石川分院に入院した。賢治は母イチとともに上京して看護にあたり、病状を父政次郎へ逐一報告している。1919年1月6日付の手紙で彼は「……医師より許可を得て、《寧ろ重湯の代りとして》アイスクリームを食し候。右牛乳、卵、塩等は差し入れ、氷及器械は病院の品を用ひ附添の者之を作り今後も毎日之を取るべく候」（校本宮沢賢治全集第13巻121頁）、と書いている。このとき賢治はアイスクリームを一匙々々トシ子に食べさせたのであろう。その記憶がこの臨終のときの雨雪に蘇生再現されたのであろう。
19）＝南無妙法蓮華経